OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	CSCD での８年間 : 科目「研究の社会的責任」と「私と世界の遠近法」をめぐって
Author(s)	高田, 珠樹
Citation	Communication-Design 特別号. 2016, 1, p. 78-85
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/55670
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

CSCD での８年間

科目「研究の社会的責任」と「私と世界の遠近法」をめぐって

高田 珠樹

KEYWORDS

研究倫理

現代社会

ドイツ思想

AUTHOR

高田 珠樹 | Tamaki Takada
コミュニケーションデザイン部門　教授

ハイデガーやフロイト、スローターダイクを中心にドイツ語圏の哲学・思想について研究してきたが、現代ドイツの様々な動きに関する授業を担当しており、思想に限らず現代社会の諸問題に関心がある。ドイツのラジオやテレビのニュースや討論、教養番組を各種端末プレーヤーで随時視聴するのが日課。視聴覚メディアを授業や教養教育に用いる方策を試行している。

早いもので大阪外大が阪大と統合してから、この 2015 年秋で 8 年になる。ということは、私がこのコミュニケーションデザイン・センターという組織に身を置いてから、やはり 8 年になるわけだ。センターは 2016 年春で発足 11 年を迎え、それをもってひとまずその歴史に区切りをつけることになっている。それでこの間のことを組織として総括し、その一環として私も、自分がその中で行った仕事について想起しようということになったわけだが、私自身に限って言えば、率直なところ、今ひとつ反省的な検討の核となるべきものが思い当たらない。

たしかに 8 年間、このセンターで授業を担当し、また授業以外の仕事に携わってきたが、形の上でここに所属してからも、教員としての業務の大半は箕面キャンパスと呼ばれることになった、かつての大阪外大のキャンパスで行ってきたし、授業の内容も主としてドイツとドイツ語に関することに向けられてきた。この 8 年を CSCD の教員として総括できるほど、こちらの組織で仕事に専心してきたわけではなかった。当初、誘いを受けたときにはもう少し違った役割を果たすことになると考えていたが、これは思い通りにはいかなかった。その辺りを含めて、想い起こせるところをやや散漫になるが書きとめておく。この種の文章を書く機会は多分もうないだろうから、移籍の際の事情にも触れておきたい。

1

統合・移籍をめぐる動きのなかで

統合以前、私は、長く大阪外大のドイツ語専攻の教員だった。もともと出身も学部は大阪外大のドイツ語学科だし、その後 5 年間、京大の大学院で哲学を専攻したが、大学院を終えた後、外大のドイツ語学科に助手として戻った。もっとも、私が京都で学んでいる 5 年のうちに、外大は天王寺区の上本町から箕面市東部の丘陵地に移転していた。駅から繁華街を通り抜けて通ったかつての大学と、郊外の住宅地の外れに位置する新しいキャンパスとではずいぶん様子が違っていた。ただし、教員はほぼ自分が卒業した頃の顔ぶれのままで、その意味では古巣に戻ったという感じだった。その後、学内の体制に若干の改組があり、所属部署の名称が変わることもあったが、基本的にずっと大阪外大のドイツ語専攻の教員であった。20 数年間、職場が変わらなかった。その間、学科内で多少、騒動が持ち上がることもあったし、教員同士の対立が生じることもままあったが、基本的に教員の在りようについてあまり迷ったり考えこんだりすることはなかった。

統合がなければ、多分そのまま定年を迎えたことだろう。統合の話が持ち上がったのは、かなり前だと記憶するが、実際にその内容について具体的な話が詰められ始めたの

は、統合の数年ばかり前のことだった。かなり煮詰まったかに見えた話は一旦白紙に戻され、統合はこれで立ち消えになったのかとも思われたが、その後、両大学の執行部が入れ替わり、ここで新たに話が進められることになった。

それぞれの新しい体制の中で、統合についての両大学間の協議において阪大の側で中心になっていたのは、当時、副学長を務めていた鷲田清一さんだった。鷲田さんとは若い頃からの知り合いで、哲学に関連していくつか一緒に仕事をさせてもらったことがある。特にその数年前から岩波書店の『フロイト全集』の編集の仕事で定期的に顔を合わせていた。いまだに完結していないこの『フロイト全集』の仕事も、最初、私は鷲田さんから誘いを受け、初めのうちは京大の人間環境学研究科の新宮一成さんと 3 人で編集の相談をしていた。今となっては信じがたいが、3 人とも 40 歳代だった。後に編集委員や編集の仕事を手伝ってもらう人が増えたが、当初は、ごく私的な集まりだった。「コミュニケーションデザイン・センター」という名称を鷲田さんの口から聞いたのも、たしかこの編集会議の席だったと記憶する。鷲田さんが音頭を取って、何かハイカラなものが万博記念協会の事務所に間借りする形で立ち上げられる、といった印象で、自分にはあまり縁のないものと感じられ、さほど気に留めることもなかった。将来、自分がそこに属することになろうとは思いもしなかった。

両大学の統合の構図が次第に明確になり、それを詰める仕事も含め、副学長としての業務が忙しくなって、鷲田さんは、『フロイト全集』の編集会議そのものにはだんだん出席されなくなったが、それでも電話を含め、ときどき話す機会があった。統合後の外国語学部の規模や構成に関する議論が山場を迎えたのは 2005 年の夏ぐらいのことだっただろうか。2006 年の年明け以後は、統合後、それまで外大に属していた教員のうち誰がどこに貼りつくことになるのかといった、少々生臭い話が出てくるようになった。非公式ながら文学部に来ないか、という話もあり、私も別に異存はなかったが、先方の事情もあってそれは流れたようだった。統合後も、外国語学部で授業を持つことになっていたから、自分の所属先が外国語学部であるのに特に異存があるわけでもなく、そのまま箕面に留まることになるだろうと思っていた。

ところが、2 月初めくらいだったと記憶するが、ある朝、当時 CSCD のセンター長を務めておられた中岡成文さんから電話があった。CSCD に移籍する気はないか、という照会だった。中岡さんは、CSCD のセンター長を務めておられるとはいえ、もともとは鷲田さんと一緒に文学研究科の臨床哲学の講座を担当する教授で、その意味では自分と同じ分野の人である。私が京大の大学院に入った年に受講した授業でご一緒して以来の面識だから、ずいぶん長くなる。コミュニケーションデザイン・センターといっても、どんな組織だかよく分からないだろうし、電話で説明するより直接会って話したほうが早い、ということで、結局、車で出向いて、その万博記念協会の建物を見せてもらった。具体的に何をどうするのか、移籍したら授業は何をどれだけ担当することになるのか、

といった話は、当初あまりしなかった。

私に限らず、統合で誰がどこに配属されることになるか、といったことを含め、実際、多くのことがほとんど1ヵ月足らずで決まっていったのではないだろうか。外国語学部に残る教員の頭数に制限があるといった、どれだけ確かであるのか分からないような情報も出まわり、誰かが他部局に出向かないと統合が進まないといった話もあって、私の場合、実際にここで行われている業務にどれだけ貢献できるか、あまり確信が持てないまま、特に不都合もなさそうだということで移籍に同意した。

2

CSCD 科目「研究の社会的責任」をめぐって

CSCD で担当する授業については、大学院の共通教育として、当初、学生たちが普段、生きている身のまわりを世界史や現代世界の文脈の中に入れて考えるような科目なら、自分のこれまでやってきたことの延長として可能だろうと判断し、開講希望科目としてそういった趣旨の授業を提案しておいた。ところが、4月の初めに新任教員の担当科目を文科省の構想審に提出した、という話が伝えられたときには、私は「研究の社会的責任」(a) という科目を担当することになっていた。かなり慌ただしく策定され、すでに提出済みで、もはや変更はできないとのことだった。ただ、中岡さんによると、統合直後は外国語学部の授業が忙しいだろうから、授業は当面、不開講ということでもよいのではないか、実際にどういう授業をどういう形で持つかについては、統合後の混乱が落ち着いてから、おいおい考えればよいという話だった。

分野としての研究倫理について、それまで専門的に考えたことはなかったから、少々面食らったが、当面は形式的に貼りついているだけで、軌道修正した上で、実質的な授業科目とその内容を考えればよいとのことで、ひとまず納得した。

そのしばらく後のことだったと思うが、東京での学会の帰りの飛行機でたまたま鷲田さんと一緒になった。混んでいなかったせいもあり、並んで座ることになった。統合の話も出たが、その時はこの件がすでにおおよそ骨格が固まっていたこともあり、話題はCSCD に関することが中心だった。何しろ CSCD を中心になって立ち上げたご本人だし、私もこの先、何をどうしてよいやら困惑していた頃で、鷲田さんとこの件で話せるのはたいへんありがたい機会だった。鷲田さんの意見では、私が研究倫理にこだわる必要はない。外大のドイツ語専攻で、ドイツのニュースを視聴し新聞雑誌の記事を読んでいる授業を、全学向けに開講してくれればそれが自分の考える実に CSCD らしい授業だと思う、ということだった。そう言われると私も安心した。ドイツ語専攻の中では、哲学

や現代思想に特段の関心を持つ学生はそれほどおらず、私の場合、狭い意味での専門よりも、こういった現代ドイツ社会に関わる授業でのほうが、専攻全体への貢献は大きく、また長年、担当してきたせいもあり、自分なりに授業を運営する手順もおおむね確定していた。もっとも、統合後、CSCD の中で私が担当する科目は「研究の社会的責任」に固定されていた。そういった馴染みの科目を担当するなら、CSCD でも何とかやっていけそうな気がした。

このようにして外大の各教員の移籍や残留、担当授業が決まっていき、その年の夏に両大学は統合した。外国語学部からは、私のほかに、森栗茂一さんと林田雅至さん、小林恭さんが CSCD に移籍した。小林さんは、京大で教育哲学を学ばれた人で、外大でも教育学と教育哲学を担当されていたが、ナイチンゲールについて論文があり、CSCD の臨床部門と主題が通じるということで、中岡さんが私に、ぜひ CSCD に移籍するように声がけしてほしいと依頼されたものだった。統合に先立ってセンター長が中岡さんからやはり文学研究科の金水敏さんに交代した。

授業は、統合から半年ばかり経った 2008 年の前学期から、担当し始めた。統合後しばらくは CSCD の授業は担当しなくてよい、といった手前勝手な話は結局、通らず、1 年目から担当した。しかも、大学やその内部の組織が新たに立ち上がる際には、あらかじめ担当者を特定した上で科目の一覧を取って認可を得ているから、通常は 4 年間、科目や担当者を変更できない。したがって、私はこの「研究の社会的責任」を 4 年間、続けることになった。4 年間の縛りが解けた 2012 年度からは、「私と世界の遠近法」(*b) と題する科目を 4 年間続けてきた。纏めると以下のようになる。

- 2008 年度～ 2011 年度、前期 1 科目、「研究の社会的責任」、後期担当なし。
- 2012 年度～ 2015 年度、前期 1 科目、「私と世界の遠近法」、後期担当なし。

要するに、統合とともに CSCD に移籍してから今までの 8 年間を総括すると、最初の 4 年間は「研究の社会的責任」、後の 4 年間は「私と世界の遠近法」を担当したことになる。

「研究の社会的責任」は、主として大学における研究上の社会的責任について自覚してもらうための授業で、受講生の数も当然、年によって異なるから、やり方は毎回、多少、変わるが、おおむね最初の数回は、講義形式で現在の大学を取り巻く状況などについて話し、あとは、参加者の研究内容とそこに作動する社会的な責任の意識などを話してもらうことにしていた。そして、その発表に基づいて、いろいろ議論することにしていた。ただ、もともと人数が多くても十数人前後だし、少ないときは 5、6 人で、しかも常に参加者が来るとは限らない。2 年目のように、受講者が多く、なぜか議論も大いに盛り上がった年もあったが、逆に、年によっては、ほとんど沈黙が支配し、発表について討論しようにも、他の受講者が押し黙ったままでいる、ということもあった。

こういった主題の授業はもちろん重要だが、やはり付け刃でやれるものではない。授業を担当して感じたのは、世の中のどの分野にも一定の規範や要請があるが、それらは分野ごとにかなり異なり、大学内といえども一律にこれが然るべき基準や倫理規範だとは断定できないことである。建前と本音との微妙なさじ加減は、どの世界にもあり、ひとつの明快な基準で何もかも裁断できればそれに越したことはあるまいが、世の中、それほど単純ではない。学生たちと話していて、分野の違いゆえの価値観の差を感じることがままあった。文系・理系の違い、社会の実益に直結した分野とそうでない分野について学ぶ学生との違いもある。ただ、この授業の運営に困難を感じたのは、漠然とではあれ、倫理ということで一定の価値観が期待されてしまうことで、学生のほうにも当然そういった期待が作用している。哲学を学んでいると、分野外の人からは、一定の倫理について確固たる見識でも持っていると思われるかもしれないが、むしろ一定の価値観や既存の仕組みに対してまず疑問や違和感を持つことに哲学の重要な働きがある。ところが、科学の責任や倫理についてのテーマで授業が行われる場合、具体的な実践はさておき、大学の研究や現代の社会の中で通用する一定の価値観を学生たちに意識化させることが求められていよう。そうであってみれば、そもそも哲学を学んできた人間にとって、この種の授業はそぐわないのかもしれない。この授業を担当することに最後まで居心地の悪さをぬぐえなかった。

3

「私と世界の遠近法」科目での取り組み

統合後、5年目に入った2012年度からは、「私と世界の遠近法」と題する科目に変えた。「研究倫理」に関する授業は、各研究科で分野ごとに開設され始めたせいで、受講者も減っていて、あえて開講し続ける意義も乏しくなっていた。「私と世界の遠近法」という表題にしたのは、先にも書いたように、CSCDに移籍するのを打診された当初、学生たちが日々生きている身のまわりの世界を少し大きな世界史や現代世界の文脈の中で考えてみる、という趣旨の科目を検討していたからである。ただ、漠然と世界史の文脈で考えると言うと、大風呂敷になりそうで、当面、私にとって馴染みである、現代のドイツ社会と日本とを比較・対照しつつ、様々な観点から自分たちの生きている社会について考察する、という趣旨の概要を掲げた。豊中キャンパスでの開講であるから、外国語学部やその上の大学院の学生たちにとっては受講しづらいが、とにかく豊中にも多くの学生がいる以上、現代ドイツに関心のある学生はそれなりに多いだろうと考えたのだった。ふたを開けてみると、履修希望者は10名弱で、しかもドイツに特段の関心を持つ

学生は多くなかった。それぞれの学生の専門的な関心や知的興味から、一定の分野でドイツに関心がある学生を想定していたから、これは少し当てが外れた。

翌年、ドイツへの限定を外した上で、開講場所を箕面に変えた。CSCD の授業は実質的に豊中と吹田に限られ、箕面では外国学部の共通科目と合わせる形でしか開講されていない。教務担当として、箕面にもいくつか開講したいと考えていた。この年には、小熊英二氏の編集した『平成史』（河出ブックス、2012 年刊）を読んで、自分たちの生きてきた 20 数年と重ね合わせる、という形式の授業とした。趣旨としては悪くないと思うが、受講生はさほど多くない上に、学部生が中心で、就活の時期も重なったりして、定期的な出席が困難な学生もいた。また、日本語になると本来、読みやすいはずが、負担が軽く感じられるせいか、むしろ予習もおろそかになってしまう。学生の間でも、内容への関心の多寡の差が顕著で、本の内容をうまく引き出せたという実感は乏しい。

次の 2014 年度は、この授業を、ドイツ語のニュースを視聴する授業として開講した。これは、外国語学部で、その前年から担当替えがあり、私の場合、2 年生の複数クラスの授業と後期のゼミを担当したことから、従来ドイツ語専攻で開講していたこの授業が開講できなくなったからである。私としては、これを CSCD 科目と同時に外国語学部の専攻科目として開講したかったが、これは制度上できないとのことで、結局もっぱら CSCD 科目としてのみ開講した。これは、前年度の授業で、ドイツやドイツ語という限定がなかったにもかかわらず、結構、ドイツ語専攻に属する学生がいたからでもあり、これなら、ドイツ語を用いる授業としてもさほど実害はあるまい、むしろ結果として CSCD 科目の受講者が増えるなら結構ではないかと考えたのだった。この種の科目を私がドイツ語専攻で開講するときには受講生が概して多い上に、専攻外でドイツ語を学ぶ学生にも開放するなら、その分増えるのではないかと見込んだのである。しかし、これは当てが外れた。受講者はさほど多くなく、しかも最初に登録したドイツ語専攻の学生も、この科目がドイツ語専攻の必修科目に算入できないのを知ると、何人かが履修を取り消した。予習や復習が多く求められる授業であるにもかかわらず、CSCD 科目のように自由科目にしかならず、卒業必修単位としてカウントされないとなれば、彼らからすると割に合わないのである。

さらに、ドイツ語専攻外の学生たちにとっては、ニュースの視聴は難度が高すぎたようだった。実際には、ビデオの音声も私が聴き取って紙に起こしたものを学生たちに後から配布する上に、ニュースなどに用いられる独特の術語や言い回しを除くと、文章表現としては専門書を読むよりもやさしいが、それでも専攻外の学生にとっては難しかったようで、せっかく登録した学生たちも来なくなった。できれば箕面で、と考えたのだが、外国語学部のように、大学院進学者が少なく、学部 3 年生の時点では授業の負担が重く、4 年生になると就職活動や卒業論文の準備で余裕のない学生が多いところでは、あえて開講することにこだわる意義は乏しいのかもしれない。

それもあって、2015 年度は開講場所を豊中に戻した。科目名はそのままで、授業の内容を「『存在と時間』拾い読み」とした。一昨年、ハイデガーの『存在と時間』の新訳を刊行したせいで、昨年は、この翻訳に関する学外の研究会や集まりに何度か呼ばれ話す機会があった。刊行の前には、念校と呼ばれる 4 度の校正も行い、解説や索引作りのために何度か読み直した。本全体の内容をあらためて整理する機会でもあった。普段の授業では『存在と時間』を読む機会などドイツ語の原文でも日本語の訳でもほとんどない上、全体の構図をざっくり頭に入れ直したばかりで、折角の機会だからこれを授業に用いたのだった。CSCD の授業にどれだけふさわしいかは分からないが、哲学科での授業なら、細かな精読が求められるところだろう。授業としては悪くなかった。院生を中心に 10 名強の学生が登録したが、実際に始まると、少し減った。個々の箇所について多少、討論するつもりだったが、なかなかそういう形にはならない。結局、ややゼミ形式を取り入れた講義のようになってしまった。ただ、15 回の授業にしては『存在と時間』の概略についてかなり踏み込んで解説する授業になったと思う。学生たちの感想もおおむね好評だった。これまで私が CSCD の中で行った授業としては、多分、最も中身の濃い授業だったはずである。

4

8 年間を振り返って

振り返ると、とにかく慌ただしい 8 年だった。私の場合、個人的には、いまだに終わらない『フロイト全集』の編集と、20 年近く前に依頼された『存在と時間』の翻訳・刊行に重なる時期でもあり、それらの仕事や学部の授業に追われ、CSCD そのものにはあまり貢献できなかった。ドイツ語のニュースの視聴の授業を全学向けに開放するといった話は、できれば確かに結構だが、実際のところは、その基礎となるべき全学向けの語学の授業の少なさから考えると非現実的だった。また、移籍教員の場合、ひとつの授業を最初から最後まで一人で担当しているが、これでは討論の形式には向かないのかもしれない。そう指摘する学生もいた。その辺りも含め、これからの授業の構成を考える足掛かりとしたい。

リンク先

*a)「研究の社会的責任」: http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/2012/000280.php
*b)「私と世界の遠近法」: http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/pdf/syllabus2015_86-87.pdf